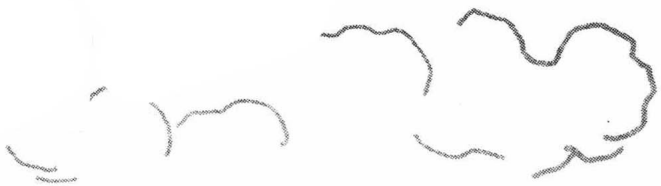


幽霊に殺された男

吉田六郎



短篇小説集

幽霊に殺された男

吉田六郎



勁草出版サービスセンター

幽霊に殺された男

昭和五十六年十月十日 印刷
昭和五十六年十月十五日 発行

定価一二〇〇円

◎著 者 吉 田 六 郎

伊東市鎌田小倉平一〇八六丸善ランド三三三

発行者 井 村 寿 二

発行所 勁 草 出 版
サービスセンター

東京都渋谷区道玄坂二一十六一三
電話 東京 四七六―五四六四(代)

発売所 勁 草 書 房

東京都文京区後楽二一二十三―十五
振替 東京 五―一七五二五三

印刷所 精 興 社

製本所 牧 製 本

- ・落丁・乱丁はお取替えます。
- ・無断で本書の全部または一部の
複写・複製を禁じます。

0093—992103—1836

幽霊に殺された男 目次

てるよ	三
少年	五五
貞女	一四三
女の出世	一六一
幽霊に殺された男	一七九
あとがき	二三七

て
る
よ

てるよの膝の上に写真がある。家の真ん中に当る薄暗い茶の間で、長火鉢のむこうには、火鉢に隠れる程に小さい父親がいる。老眼鏡をずり落ちるほど鼻にかけた母がいる。写真は母が外出先からもって来て、両親で見たうえ、てるよに渡したものだ。一目見た時、てるよははっと思った。たしかにあの顔だ。去年の六月、上京する電車の中で見た人にちがいない。

S 駅で電車に乗換えた彼女は、乗換え時間が少いので、あわてて最後部の車にのった。向い合いの座席にはだれかいると見え、パナマ帽がのっている。発車のベルが鳴ると、一人の男がどこからともなく現れ、帽子を除けてすわった。

てるよ
走ったので、じっとり汗ばんだ。電車が走りだすと、風を入れるために窓を開けた。走る方向にむいていたその男の膝から、パナマ帽が煽られて立上り、ふわふわと通路を飛んだ。半分開けた窓を持ったまま、帽子を目で追い、彼女は思わず「あ」と叫んだ。男は追

っかけてつかまえ、ちりを払って網棚にのせた。

「ごめんなさい。」

男は無言で首をふり、半分上げたままにいる彼女に手伝って、重い窓をおし上げた。その拍子に、風を孕んだ白い上着が、いきなり、ぱささと彼女の頬にぶつかった。洗濯したての、さっぱりした麻の感触である。

「失礼しました。」と、こんどは男が詫びた。

「いえ、いえ。」

とつよく頭をふりながら赤くなった。遠慮なくびゅうびゅうと顔に吹きつける風に悩みながら、工合のわるい窓をうんとこさ二人がかりで持ちあげるのが、おかしいやら、恥かしいやらで。

桐林が幾つも幾つも窓のそとを飛んでゆく。電車に触れんほどの近さに茂った大きな葉が、ざわざわと激しく揺れる。電車はうねりうねり、ひどく揺れて走った。風がそのたびに、左右の窓から吹き込んで、車内をぶうぶう吹いた。帽子が網棚の上で不安げにころがった。窓のそとへ飛びはせぬかと心配されたので、立ちあがって、帽子の縁に、ハンドバ

ッグの重いのをのせた。

振り仰いで、てるよの所作を見ていた男は、彼女が席につくと「有難う」といって、軽く頭をさげた。

その時初めて、まともに見た。厚地、交織の黒ネクタイを締めている。黒がこれほど効力を發揮しているのを、彼女は今迄ついぞ見たことがなかった。ありふれた、田舎っくさい色とのみ思っていたのに、さわやかな白服のあいだでは、黒と思えないほどの光沢と香気で、生き生きと輝いている。何となくすっきりした感じだ。そう思った時、黒の大きな瞳が、ぐると回転して、彼女の視線の上に落ちた。その刹那、彼女は言い現すことのできない深い感じに打たれた。豊富というか、光輝かがやきというか、とにかく、何かそんなものが、頭の上にどさりと落ちかかった感じだった。

話しかけられることをひそかに待ちもうけたのに、男は窓ぎわを退いて、ポケットから拔出した小型の本に、そのひとみを落した。

てるよは、向い側の男の目が、ようやく動揺のしずまった電車の中で、活字を追ってじろりじろりと動くのを遠慮なく見た。いくら遠慮なく見ても、一心になつてしまったから、

気づかれる憂いはない。

やがて右手にひろびろとした水田が見えて、涼しいものが窓に吹込んで来た。青田の中にぼつぼつと、無数に白い点が浮いている。何だろう？ 瞳を凝らしたが分らない。幻覚かと目をこすったが、そうでもなさそうだ。てるよは半分腰をあげて、しきりに見定めようとおせった。電車が近づくにつれて、鷺だと分った。田の中に佇むのがある。あぜに舞いおりて、まだ羽をひろげたままのがある。田の中に一本立つ傘松から、まさに舞い上ろうとしているのや、二、三羽ならんで斜めに飛ぶのや、さまざまの姿態である。

彼女は一遍どこかでこの景色を見たような気がしてならなかった。(夢だったかしら？いえ、夢じゃない。たしかにどこかで。が、その時はだれと一緒に、どこへ行く途中だったかしら？)

どうあっても思い出せなかった。

彼女は腰を浮かしたまま、思わず声を立てた。

「鷺がいます。」と、馬鹿ていねいな田舎言葉で。

その声に本から顔をあげた男は、同じように立ち上って窓外を見た。

「動物園から逃げて来たのでしょうか？」

「まさか——」と男は笑って打消した。

「野生であんなにきれいなのが……」

電車はみるみる外まわりにカーヴして、白鷺は視界から消えた。けれどその幻像はいつまでも、てるよに残って、払おうとしても消えなかった。

てるよは腕時計をのぞいて

「もう東京に近いんですね。それなのに、あんなきれいな鳥が……不思議です。」

「僕も鷺なんて動物園でしか見たことがありませんね。」

その瞬間、てるよの頭に（あら！ この人、知らない人だ、なんて不思議なんでしょう！ つい今しがたまで、とうの昔から傍にいた人のように思っ、疑ってもみなかったのに！）という思いがちらりとひらめいて、夢からさめたように、相手の顔を上げしげと見つめた。

男はきいた。

「あなたは東京へおいでですか？ お買い物にでも？」

てるよ

「いえ、遊びに行くんです。兄のところへ。」

「兄さん、どちらにお住い？」

「田端におります。」

「お勤めは？」

「農林省です。」

（あなたは？）と、咽喉まで出かかったが、なれなれしく思われやしないかと反省して、口をつぐんだ。

その時、ゴトゴトと車両の下で音がして、電車は急に左にうねり、正面に松屋の高いビルディングがすっかり見えた。高いガードを走ると見え、窓の外には低く東京のいらかがひろく望まれる。ビルディングの横腹へ吸い込まれるように入ると、乗客は電燈の消えた薄暗い中で一斉に降り支度を始めた。明るいプラット・フォームへつぎつぎと降り、つながって改札口へ流れてゆく群集が影絵のように見える。

前後にならんで改札口を出、石の階段を降り切ったところで、男は言った。

「田端では、地下鉄で上野までお出ですね？」

「ええ。」

「ぼくは市電で神田まで行きます。じゃ左様なら。」

いささか名残惜しげに帽子をぬいだ。

「左様なら。」

彼女はあわてて腰を折って、目を上げると、男の姿は、円柱の陰になって、正面の階段をもう降りている。

てるよはすぐ左手の地下鉄の穴へ、五、六段降りかかったが、急に、忘れ物でもしたかのような気が起り、とんとんとって返し、急いで駅前を見廻したが、男の姿はもう影も形もない。空へ消えてしまったような気がした。

一一

てるよ

写真の主はぬしその男である。彼女は改めて膝の上の写真を見た。背後に本棚が写っている。大きな腫がじっとシャッターを見詰めている。着ているのは、涼しそうな白緋である。着物と洋服のちがいこそあれ、爽やかという感じは、去年とまったく同じである。見ている

うちに、青々とした稲田と、真白な鷺の群れ飛ぶ有様とが、幻像となって浮び上った。茶をついで茶托にのせた母は、父の方に押しやり乍ら、娘の方を振りむいて

「どう？」

ときいた。

「どうって？」

「喜世がなんというだろうね？」

「姉ちゃん？ そうね、送ってみなければ分らないけど……」

「お前ならどう？」

母は畳みかけてきいた。てるよは顔赤らめて口ごもった。

「さあ、だって姉ちゃんの縁談でしょう？」

「でもさ、お前のところへ話があったとしてもいいじゃないの。お前も年としごろだし

……」

「でも、姉ちゃんのでは……」

「わからない人ね。姉ちゃんは遠くにいて、急には返事がきけないから、お前に大体の

ところをきいておきたいんだよ。私たちは先方のお家を調べてご返事するつもりだけど、お前にはこの写真の方がどんなだか、感じが言える筈じゃないの？」

「あたしだったら……」

急に胸がつかえてしゃべれなくなった。母が見ると、顔を真赤に火照^{ほて}らせている。

そこへ、速達！ という声がして、コンクリートの土間へ、厚い封書が投げ込まれた。

てるよは早速立って、土間と座敷をつなぐ厚板の階段から下駄を突っかけて降り、手紙を拾い上げて、裏を見た。

「山瀬さんから。」

「どれ、早くお見せ、速達なんて、喜世に何か変ったことでもあったのかしら？」

母は封を切り、火鉢のむこうからのぞき込む父に読んでさせた。

前略、取急ぎお嬢様のことに就て申上げます。御郷里の方に御縁談がありとの趣かねてうすうす承っておりましたが、お嬢様は当地にて御見合をなされた由であります。見合いと申せばもう承諾の返事をなさったのも同様と私達老人は考えて居りますが、御本人は左程重大なことで御考えなさらぬ様子です。御世話する同僚の方があって、その家で先方

の男性と会ったとかいうお話です。見ればエスペラントの会にて二、三度お目にかかったことのある人にて、貧しけれど真面目らしく見受けられるゆえ、嫁いでもよいと考えられた由。先方の方は新聞社に勤めており、継母との折合い悪しく別居されているとか。

温良なお嬢様にて、お預りしているとは申せ、私達子のない夫婦には、実の娘と変らぬ程いとしく、お郷里の縁談の成就することをば、ひたすら祈り上げておりました最中なれば、ことは正に青天の霹靂とも申すべきでありました。

第一に氣に入られたのが貧乏という点にて、私共はこれには驚くほかありませんが、貧乏の味を知らぬ大家のお嬢様は何かそこに特別の魅力を見出すものと察せられます。先方の男性はお嬢様のその甘い夢に乗じ、お嬢様の善良な犠牲心をあてになさったと邪推されぬことはありません。私共はお嬢様の案外堅い夢を打破るに難儀しております。至急お父様のお出を願います。匆々。

母親はこれまで読んで父親と顔見合せた。

火鉢の縁に額をあてて「ウーン」と唸っていた父親は急に立上って

「時間表を調べろ、今夜急行で大阪へ発つ。それまでに東京の文雄の所へ行く。文雄も